

本当のものがわからないと 本当でないものを本当にする

石堤 長光寺 住職 織田隆夫

2020年
(令和2年)
9月23日

五位組だより

念仏のこころに生きる生活を

浄土真宗本願寺派
高岡教区 五位組

題字・織田隆夫

先日お葬式がありました。通夜葬儀は自宅の仏間で執り行い、友人や近隣の方々が外で焼香をされ、昔ながらの大変静かで落ち着いた葬儀でした。七十代の方で、数年前より癌が発症しご家族の皆さんに支えられながら闘病生活を続けてこられました。しかし、三月に入りコロナの影響で見舞いにも行けず、家族の付き添いさえも許されない中での辛いお別れでした。疫病とは、自分自身の生命(いのち)・家族や隣人の生命といやでも向き合わなくてはならない現実を突きつけ、わが生命・わが生きざままでも問うてきます。重ねて、私たちの身勝手さ・差別意識もあらわにさせます。そして、私は今日まで何を頼りにして何に重きをおいて生きてきたのか、残された人生をどう生きていくのかを私自身に問うてくるのではないのでしょうか。感染症の広がりとともにお寺での活動も自粛ムードが高く、各種の法座活動も自粛中止が続いています。こんなときにこそ仏法のあり様が問われ、僧侶の基本的な生き方、精神性が問われるのかも知れません。コロナも二、三年後にはワクチンもでき脅威ではなくなるでしょう。も

し生き残っていれば、コロナでは死ななかつたということ。ただそれだけの現実で、次は何で死んでいくのか見当もつかず、コロナ後の「死の問題」は何も解決されないままの思考停止状態になってしまう私です。生き方・死に方には新しい時代はくるかもしれないですが、「生死」には新しい時代は来ないのです。人間はともて愚かな存在でありましたとき、また同じ恐怖と苦悩を味わうことになるのでしょうか。

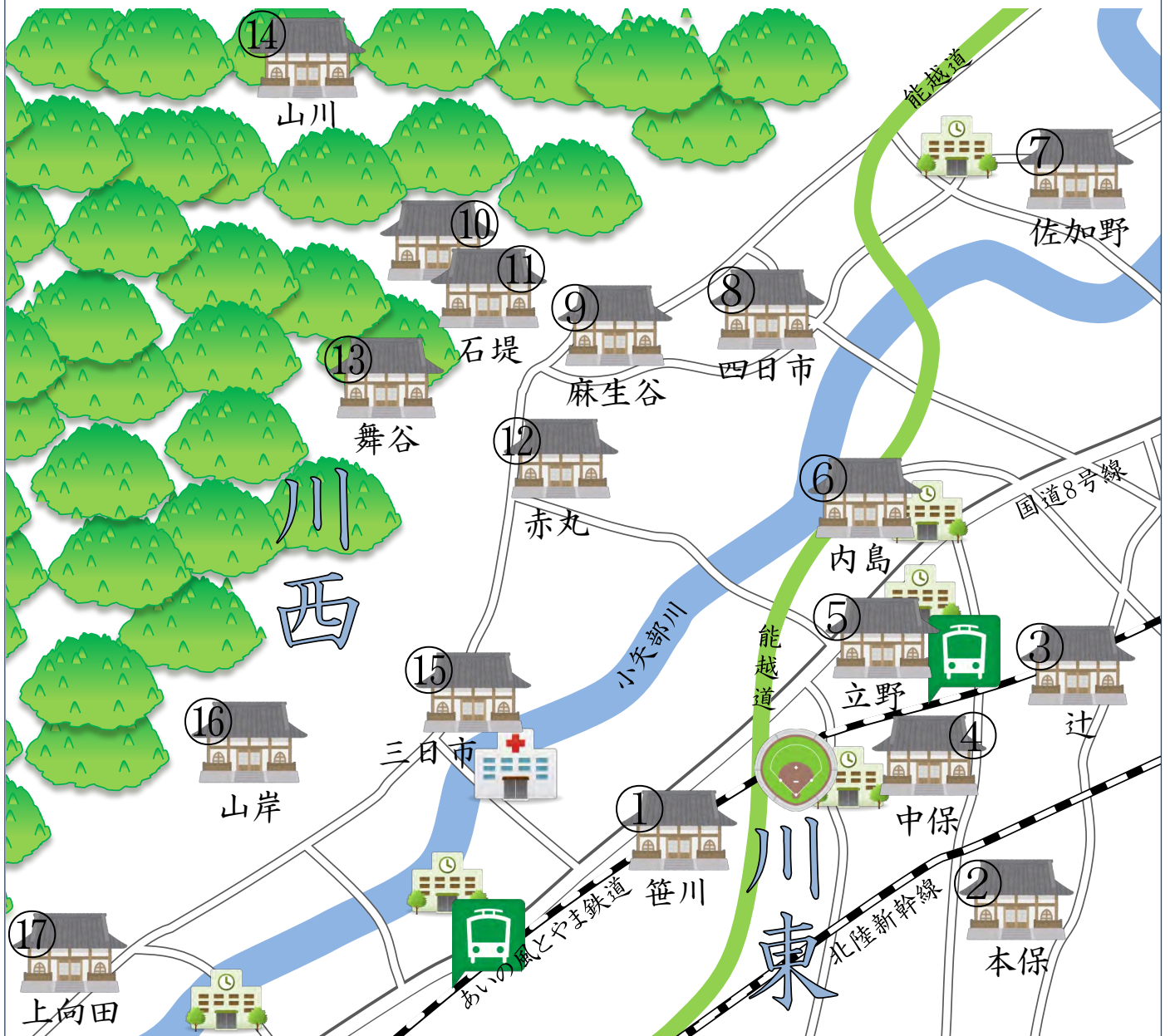
私たちはコロナ感染だけで死ぬのではありません。命を終えていく姿・年齢は様々ですが、生命を終えていかなければならない存在だからこそコロナに感染するのです。そんな当たり前のこと、その一点から目をそらしてはならないのです。感染は恐ろしく苦しき恐怖の中の時間で、できるかぎり自分や家族だけは避けて過ごしたいです。しかし、一旦感染したら、その向こう側に待っているものは私・家族・隣人の死であります。私自身の死にゆく姿に向かい合わずしてコロナが解決することは無いのかもしれない。同時に、人間の総ての恐怖は死に起因します。その後、死の恐怖は欺瞞と差別を誘発するので。最初に感染した少女とその家族が、恐怖の淵に追い込まれた道筋がそうであったように。

私たちが戦後今日まで、これが「本当のもの」だと思ひ込んできた大切なもの、それは一体何だったのでしょうか。何も頼りにもあてにもならないものを本物だと自分に言い聞かせ、社会の雰囲気呑み込まれ「何となく生きてしまった」のかもしれない。

経済優先も大切ですが、生きていけばの話で、生き生きている間の話です。今日までの人生の中で、死んでいく自分自身の生命と本気で向き合ったこと、死んでいった父や母が財産以外に残してくれたものは何だったのか、死んでいく自分の姿を想像したことはあったでしょうか? 今この感染病を機縁として、今日まで何を「本当のもの」と思い込んで生きてきたのかを、その「本当のものが」のかを真摯に考えなくてはならない時代に入っているのだと思います。私にも解らないことだらけですが、皆で考えてみましょう。私の願っていた世界はこれでもいいのか、自分はどうありたいのか、世界はどうあつてほしいのかを。私にできることは何もないかもしれない。しかしこうあつてほしいと願い、話し合い、こうありたいと行動することはできるような気がします。

今まさに「本当でないものを」本当と言い聞かせてきた自分を、もう一度みつめてなおしてくれと、コロナが疫病が「お念仏」が私たちに問いかけているのかもしれない。「お念仏」とは私自身の本当の姿を映す鏡であり道しるべでもあります。醜く愚かで、この生命が帰る場所も無いまま生きてきた私を映し出し、「他者と共に生きてくれよ」「浄土に生まれてくれよ」と私たちを励まし勇気付けてくださる羅針盤なのです。この生命が尽きる時、百年に一度の感染病で何を思い、感じ、次の世代に何を伝えたいのかに出会える時を過ごしたいものです。

五位組寺院マップ



かわひかし
～川東～ ※小矢部川右岸（東側）

- | | | | |
|---|-----|-------|------------|
| ① | 廣濟寺 | 福田 史朗 | TEL31-0096 |
| ② | 本正寺 | 福保 秀涯 | TEL31-2525 |
| ③ | 西福寺 | 豊原 正靖 | TEL31-0744 |
| ④ | 善教寺 | 藤田 大了 | TEL31-1453 |
| ⑤ | 永念寺 | 福澤 庸二 | TEL31-1083 |
| ⑥ | 教願寺 | 岡西 好持 | TEL31-0961 |

かわにし
～川西～ ※小矢部川左岸（西側）

- | | | | |
|---|-----|-------|------------|
| ⑦ | 光明寺 | 磯原 正浩 | TEL23-8682 |
| ⑧ | 浄明寺 | 鷺溪 映子 | TEL31-1230 |
| ⑨ | 西光寺 | 養藤 直哉 | TEL31-2186 |
| ⑩ | 長光寺 | 織田 隆夫 | TEL31-1128 |
| ⑪ | 法善寺 | 武部 淳示 | TEL31-1290 |
| ⑫ | 性宗寺 | 中山 法遂 | TEL31-1191 |
| ⑬ | 永賢寺 | 麻生 達乗 | TEL31-2129 |
| ⑭ | 永善寺 | 中山 法遂 | TEL31-1191 |
| ⑮ | 光源寺 | 江畠 哲英 | TEL64-2721 |
| ⑯ | 珉照寺 | 山岸 智史 | TEL64-2738 |
| ⑰ | 浄永寺 | 齋藤 芳撰 | TEL64-2670 |

なまもみださんらー



報 恩 講 ご 案 内

各寺院の日程順に記載してあります。

佐加野 光明寺

九月十九日 昼 一時三十分
九月二十日 朝 九時三十分

法話 高岡市内島 岡西 法英 師
※ 勤修されました

石堤 法善寺

九月二十六日 昼 一時三十分

法話 高岡市戸出六十歩 林 要昭 師
※ 永代祠堂経法要を併修

舞谷 永賢寺

コロナウィルス感染拡大の状況に鑑み、
例年の報恩講法要は、

中止 とさせていただきます。

赤丸 性宗寺

十月十一日 昼 一時三十分
十月十二日 朝 九時三十分

法話 射水市市井 公文名 眞 師

四日市 浄明寺

十月十四日 朝 九時三十分
十月十五日 朝 九時三十分

法話 射水市市井 公文名 眞 師
※ 十四日は永代祠堂経法要

詳細については、各寺院にお問い合わせ下さい。

辻 西福寺

十月十七日 朝 十時

法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

立野 永念寺

コロナウィルス感染拡大の状況に鑑み、
例年の報恩講法要は、

中止 とさせていただきます。

三日市 光源寺

十月二十二日 朝 九時三十分
十月二十三日 朝 九時三十分

法話 高岡市佐加野 磯原 孝雄 師
※ 二十二日は永代祠堂経法要

本保 本正寺

十月二十六日 昼 一時三十分

法話 高岡市内島 岡西 法英 師

内島 教願寺

十月三十日 昼 一時三十分
十月三十一日 朝 九時三十分

法話 高岡市佐加野 磯原 孝雄 師

中保 善教寺

コロナウィルス感染拡大の状況に鑑み、
例年の報恩講法要は、

中止 とさせていただきます。

石堤 長光寺

十一月一日 朝 九時三十分
十一月二日 朝 九時三十分

法話 氷見市布施 圓山 望 師

笹川 廣濟寺

十一月五日 朝 九時三十分
十一月六日 朝 九時三十分

法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

麻生谷 西光寺

十一月七日 朝 九時三十分
十一月八日 朝 九時三十分

法話 氷見市脇 寺西 良夫 師

上向田 浄永寺

十一月十二日 朝 九時三十分 昼 一時三十分

法話 高岡市笹川 福田 慶隆 師

山岸 珉照寺

十一月十六日 昼 一時三十分
十一月十七日 朝 九時三十分

法話 高岡市伏木 山名 一徳 師

仏教語アラカルト

教願寺 前住職 岡西法英

その①
南無阿弥陀仏を呼び間違う

南無阿弥陀仏を呼び間違う人が多い。「なみあみだぶつ」「なみあむだぶつ」「なむあむだぶつ」など、いろいろの呼び間違えを耳にする。文字をよく見れば間違えるはずがないにもかかわらず、何故そうなるのか。南無の二字と阿弥陀仏の四字が合わさってできた六字の名であることを意識せず、唱え慣れない一種の（おまじない）の文句のようになっているからであろう。ちなみに言えば、親鸞聖人がもちいられた「南无」の「无」の字は「無」の古字であり、ひらがなの「ん」の字はこの「无」の草書体である。現在は、「む」「ん」と発音しているが、古くは「も」と発

音した字である。だから、本願寺派では「なもあみだぶつ」と発音するが、大谷派では「なむあみだぶつ」と読む習慣である。

南無の二字は、インド語の（ナモ）の当て字であり、「帰命せよ」（我が号命に帰依せよ）わたしの呼びかけをよりどころと仰げ）の意である。阿弥陀仏の四字は、インド語の（アミターバ・アミターユスブダ）の当て字であり、無量寿仏・無量光仏の意である。南無阿弥陀仏は阿弥陀如来からの、「南無と信ぜよ、この阿弥陀仏が必ず救うから」との名乗りであり、呼び声であるから名号ともいうのである。

合掌

五位組行事予定

二十五日講

報恩講

十月二十五日（日）

二座 九時半～

十三時半～

法善寺

平等講

助成会・追悼会

十一月二十五日（月）

十四時～

永念寺

蓮門会

テーマ

「蓮如上人のことば」

講師 岡西法英師

令和三年（二〇二一年）

二月七日（日）

十五時～

教願寺

編集後記

新型コロナウイルス感染の収束が見えず、今は第二波で毎日感染者の報告があり拡大が続く、私たちの生活環境も変わってしまいました。

二カ月前のコロナ感染が一旦落ち着いた頃です。知人が亡くなり通夜のため会場に伺うと式はいつもと違っていました。故人と仏さまに焼香し、家族の方に挨拶をさせて頂くだけのお参りでした。故人を偲ぶことができず、さみしさと違和感を抱きました。

しかし、コロナ感染が終息しても生活様式は変わったまままだといわれています。コロナ感染が私たちに及ぼした影響は計り知れません。感染した人は体と心が、その家族も心が、そして周囲の私たちも心が病んでしまった病気であると思います。こんな時に相手を思いやり助けることが大切なのに、それができない心のはかなさを感じずにはいられません。早く人としての振る舞いが穏やかに行える平穏な生活を迎えたいものです。

合掌